

電子時代の漢字研究

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」(朝日新聞社後援)のシリーズ6「中国学研究最前線」が始まった。初回の2月1日は、中国から日本に伝来した漢字がテーマ。国の常用漢字表の改定にもあたっている京都大学大学院人間・環境学研究科の阿辻哲次教授が「電子時代の漢字研究」と題して、時代による漢字の変遷を紹介した。



阿辻教授が『大書源』(二玄社)をもとに作成し、スクリーンに映し出したさまざまな「逆」の文字

●しんにゅうの点はいくつ？

この日の講座を貫く「材料」として、阿辻教授が取り上げたのは、部首の「しんにゅう」(「しんにょう」ともいう)だ。スクリーンに映し出したのは、「邁進(まいしん)」「巡邏(じゅんら)」「邂逅(かいこう)」という三つの言葉。いずれの字も部首はしんにゅうだ。ただし、よく見ると、「邁」「邏」「逅」は、しんにゅうの点が二つだが、「進」「巡」のしんにゅうは点が一つ。阿辻教授は「この“点の数の違い”こそ、漢字の移り変わりを示す手がかりです」と語った。

しんにゅうの由来を尋ねて、話題は紀元前3千年にさかのぼった。

阿辻教授は、書道の辞典から集めた様々な時代の「逆」という字をスクリーンに映し出した。甲骨文字を使っていた古代中国・殷の「逆」は、人間が逆立ちしているよう。漢の時代のしんにゅうは、形は現在と似てくるが、点の数は二つだったり三つだったりまちまちだ。唐の時代も点はゼロ、一つ、二つ、とばらつきがある。

なぜ、これほど多種多様なのか。阿辻教授の答えは「しんにゅうの点の数は、実は決まっていないから」と意表を突くものだった。

●清の時代の字典がスタンダード

阿辻教授によると、中国では歴史上、何度か漢字の形を整理する動きがあった。漢字の成り立ちをもとに部首を整理した、後漢時代の「説文解字(せつもんかいじ)」がその先駆け。この書物では、しんにゅうは7画の「辵」と書いている。

その後、官俸任用試験の「科挙」で、一つの問題が生じた。答案によって漢字の字体が異なるとは、正しく採点できないというのだ。そこで唐の時代の8世紀に、標準字形を提示した「干祿字書(かんろくじしょ)」が作られた。さらに清朝の時代の18世紀、漢字字典の集大成「康熙字典(こうきじてん)」が編集された。この康熙字典は「第2次世界大戦が終わるまで、中国でも日本でも朝鮮半島でも、漢字のスタンダード」(阿辻教

授)だった。この字書では「しんにゅう」の点は二つ。従って、「点二つが正しい」ことになった。

●戦後の国語政策で揺らぎ始める

日本で漢字が揺らぎ始めたのは終戦直後だった。

阿辻教授によると、連合軍総司令部(GHQ)の指導の下、日本で「漢字は廃止か、少なくとも制限するべきだ」との議論が起きた。そんな状況で、一般社会で使う漢字の範囲を示したのが1946年の「当用漢字表」だ。さらに49年、正しい活字製作の指針である「当用漢字字体表」(いわゆる当用漢字)が定められた。

当用漢字には1850字が収録された。簡略化の方針に沿い、部首のしんにゅうは、すべて点一つになった。このとき、当用漢字以外の文字のしんにゅうは、点二つのまま放って置かれた。こうして、二重構造が生まれたというのである。



講演する阿辻哲次教授。「情報機器の発展は、漢字の形にも影響を与えるようになった。こんなことを誰が予想したでしょうか」

時は過ぎて1981年。当用漢字に95字を新たに加え、日常的な使用の目安である「常用漢字表」(いわゆる常用漢字)が定められた。追加された中に「逝」「遮」の二つの文字があった。本来は点二つのはずだが、「常用漢字への『出世』にあわせて、点一つにそろえた」(阿辻教授)のだという。

●コンピューターの普及で新たな問題が…

点の数をめぐる騒動は、まだ終わらない。「コンピューターの普及」という想定外の問題が起こったのだ。

阿辻教授は「1979年に、初めて市販のワープロが登場した時、値段は630万円だった。それから約30年で、誰もがパソコンや携帯電話で文章を書く時代が来るとは、我々も、文部省(現在は文部科学省)も夢想だにしませんでした」と強調した。

現在、パソコンや携帯電話の漢字は、工業規格品として一文字ずつに「コード」が付いている。「JIS漢字コード」だ。使用頻度によって、「第1水準」「第2水準」に分かれている。2004年のJIS漢字の改訂前は、常用漢字を含む第1水準の漢字は、しんにゅうが点一つ、常用外がメインの第2水準の漢字は、点二つだった。「邁進」の場合、「邁」が第2水準、「進」は第1水準で、しんにゅうの点の数が異なっているのだ。

2004年のJIS漢字の改訂では、2000年の文部省(当時)の国語審議会の答申にあった「表外漢字字体表」が反映された。「当用漢字字体表」が定められたときに放っておかれた漢字にも光が当てられた形だ。この改訂で、一部の常用外の漢字については点二つに戻すことになった。しかし、せつかく点二つに戻した漢字のいくつかは、2010年に新たに常用漢字になってしまった。「謎」の字が、まさにそうだ。

常用漢字改定の議論に参加した阿辻教授は、「常用漢字に『出世』したのを機に、しんにゆうの点は一つにするべきだ、という意見もありました。しかしそうすると、今度はコンピューターの表記と食い違いが出てしまうのです」と悩ましそうに話した。

結局「謎」は、点二つのまま常用漢字になった。「コンピューターの都合を漢字が追認せざるをえなくなったのです」と阿辻教授。講座をこうしめくくった。

「漢字は、何千年という歴史の中で、さまざまな形で書かれてきた。しんにゆうは、『点一つでも、点二つでも構わない』と教えるべきではないでしょうか」

さまざまな「逆」の字を見ていると、納得できる見解だった。

受講者から、「阿辻先生の辻は、点一つでしょうか、点二つでしょうか」と質問が出た。名刺では点二つの阿辻教授だが、「どちらでも良いですよ」と笑顔で答えていた。

(※原稿及びクレジット未記載の写真は朝日新聞社提供)



パソコンや携帯電話など、身近な情報機器で使われている漢字にも、さまざまな差異があることを興味深く聞く受講者たち